

Title	『水滸傳』の言語：補語について
Author	大内田, 三郎
Citation	人文研究. 37 卷 3 号, p.119-134.
Issue Date	1985
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	西野貞治教授・宮田一郎教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

『水滸傳』の言語

—補語について—

大内田 三 郎

はじめに

(一) 程度補語

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. 「V・de・C」 | 2. 「V・de・0・C」 |
| 3. 「把・0・V・de・C」 | |

(二) 介賓連語補語

- | | |
|-------------------|--------------|
| 1. 「V・在・C」 | 2. 「V・0・在・C」 |
| 3. 「把(将)・0・V・在・C」 | |

(三) 可能補語

- | | |
|------------------|---------------|
| 1. 「V・de」 | 2. 「V・de・0」 |
| 3. 「V・de・V」 | 4. 「V・de・0・V」 |
| 5. 「V・不・de」 | 6. 「V・不・de・0」 |
| 7. 「V・0・不・de」 | 8. 「V・不・V」 |
| 9. 「V・不・V・0」 | 10. 「V・0・不・V」 |
| 11. 「和・0・V・不・de」 | |

む す び

はじめに

補語は、述語を補足する連帯成分で、述語の後に位置する。補語は述語との意味関係で、結果補語・程度補語・方向補語・可能補語・動量補語・時間補語・介賓連語補語などいくつかに分類される。

小稿は、これらの補語の中、『水滸傳』に見られる程度補語・介賓連語補語・可能補語の三種を取り上げ、現代語の語法体系と比較しながら論述する。

補語は、単独で述語の後に用いられることもあるが、補語と同じ述語の連帯成分である賓語と一緒に用いられて、一つの述語動詞が補語と賓語の二つの成分をとることがある。補語を論じる場合、同じ述語の後置成分である賓語が関連するので、賓語を含めた文型を示し、その用例を列挙して動詞・

賓語・補語の關係を検討する必要がある。

(一) 程度補語

1. 「V・de・C」

- (1) 你如何夜来吃得大醉，打了门子，伤坏了藏殿上朱紅榻子，又把火工道人都赶走，出口喊声。(4)
- (2) 林冲等得不耐烦 把桌子敲着说道：(9)
- (3) 老儿只道他是好话，安排了半夜，猪羊都煮得熟了，摆在厅前。(73)
- (4) 程万里惊得面如土色，连忙便请兵马都监商议。(69)
- (5) 众人看时，那白秀英打得脑浆迸流，眼珠突出，动弹不得，情知死了。(51)
- (6) 张顺手起一刀，砍得一个下水去，那个吓得倒入舱里去。(91)

この用例は、現代語とほぼ同じで、述語動詞の後に補語を用いて、動作がどのような程度に達したか、またどのような結果に至ったかを説明している。程度補語を伴った文は、中心語となる述語は一音節語が多く、補語には形容詞・成語・主述連語・述賓連語などがあてられるのが普通である。この文型は、補語を含む述部が主語について説明したもので、文の主語は、主動者である場合と受動者である場合の二通りある。用例(1)(2)は、主語が主動者として自ら動作を行うもので、補語は、主動者である主語について、動作の結果どういう状態になったかを説明するものである。また、用例(3)(4)(5)(6)は、受動者である主語が動作を受けた結果、どのような状態になったかを説明している。

2. 「V・de・O・C」

- (7) 打得宋江皮开肉绽，鲜血迸流。(83)
- (8) 赶得林冲等军马星落云散，七断八续，呼兄唤弟，觅子寻爷，五千军兵，折了一千余人，直退回五十里下寨。(52)
- (9) 吓得小喽啰们目瞪口呆。(19)
- (10) 惊得洪太尉目睜痴呆，罔知所措，面色如土。(1)
- (11) 早晚必有大军前来征讨，一两阵杀得他人亡马倒，片甲不回，梦着也怕，那时却再商量。(75)
- (12) 宋江又过几日，连那婆子也有若干头面衣服，端的养的婆惜丰衣足食。(21)

この用例は、現代語の語法体系からみると、主述連語が補語となった文である。補語となっている主述連語の主語は、意味的にみると、自ら動作を行う主動者ではなく、動作の対象となる受動者で、動作を受けるものである。

用例(7)の補語は、「宋江皮开肉绽，鲜血迸流」であるが、この主述連語の主語である「宋江」は、動詞「打」の動作を受けて「皮开肉绽，鲜血迸流」という状態に至ったことを説明している。従って、同じ動詞「打」を用いた文型「V・de・C」の用例(5)と意味内容が共通するので、用例(5)にならって、用例(7)を「宋江打得皮开肉绽，鲜血迸流」と言い替えが可能である。「打」の対象になっている受動者は、用例(5)の「白秀英」のように文の主語にもなり、また、用例(7)のように「宋江」は「得」の後にも置かれる。この事実は、同じ意味内容を二つの違った文型で表現できることを示唆している。これは、主語の「白秀英」と「得」の後の「宋江」は置かれている位置は異なっているが、いずれも動作の対象で、受動者である点が共通しているために、その入れ替えが可能である。用例(4)と(10)についても同じことが言える。両者とも動詞「惊」は「惊动」の意味で他から刺激を受ける。その対象となる「人」は用例(4)では「程万里」で主語となり、用例(10)は「洪太尉」で「得」の後に置かれている。「程万里」と「洪太尉」はともに「惊」の受動者であるので、これも入れ替えが可能である。用例(4)の主語「程万里」を「得」の後に移動させて「惊得程万里面如土色」とし、また、用例(10)の「得」の後にある「洪太尉」を主語の位置に移して「洪太尉惊得目睁痴呆，罔知所措」としても表わす意味内容には変化はみられない。

現代語の語法体系では、用例(7)～(12)に用いてある「得」以下の成分は、主述連語の補語とし、「得」の後の要素は、補語（主述連語）の主語として扱っている。これは、補語となっている成分が主語と述語の関係を意味的に成立させているためである。「宋江皮开肉绽，鲜血迸流」「林冲等军马星落云散」「小喽啰目瞪口呆」など「得」の後の成分だけを取り出すと意味的に主語と述語の関係が成立する。だが、これまで述べてきたように、『水滸傳』では補語成分の主語となっている「宋江」「林冲」「小喽啰」などは動作の対象であり、動詞「打」「赶」「吓」の賓語とみなすことができる。

次に、これと同じ文型をとる用例をさらに挙げて検討しよう。

(13) 却待要和那厮放对，打得他家粉碎，却被大哥叫了我上来。(88)

(14) 柴进虽然不赶他，只是相待得他慢了。(23)

(15) 徐宁道：“兄弟，你也害得我不浅！”(50)

(16) 城边发起喊来，解珍，解宝各挺钢叉入城，都一时发作，那里关得城门迭？(9)

(17) 嫂嫂把得家定，我哥哥烦恼做甚么？(24)

(18) 宋江乘着酒兴，索纸笔来，磨得墨浓，蘸得笔饱，拂开花笺，对李师师道：(72)

(19) 那天山勇却闪在这将马背后，安的箭稳，扣的弦正，觑着张清较亲，直射将来。(84)

(20) 城外哥哥军马打的城子紧，我们不就这里放火，更待何时！(84)

この用例は、「得」の後に人称代詞や名詞が用いられて、さらにその後の形容詞あるいは動詞が連用されて、用例(7)~(12)と同じ文型をとっている。用例(13)は「得」の後が「他家粉碎」で主述連語とみされなくはない。しかし、「他家」は動詞「打」の対象であり、その動作を受けている。「粉碎」は、動作の結果そのような状態が出現したことを示している。従って、「打他家」と「打得粉碎」の二つの連語が一つの文型にまとめられものと考えられる。その他の用例も同様な解釈が可能である。用例(14)~(20)は、動作の対象となっている「他」「我」「城門」「家」「笔」「箭」「城子」は、その後に連用された形容詞や動詞とは直接、意味関係は成立しない。つまり、「他慢」「我不浅」「城門迭」「家定」「笔饱」「箭稳」「城子紧」は意味的に主述関係は成立しない。その理由は、「得」の後の人称代詞や名詞が動作の対象で、その後に連用された形容詞や動詞は動作の結果や程度を述べたもので、両者は構造的に直接つながった成分でないからである。それぞれ別個に「動詞・賓語」と「動詞・補語」を構成し、それが一つの文型にまとめられたと考えられる。

この語法現象は、現代語の語法体系では説明がつきにくいだが、「得」は補語を導く構造助詞とする点に問題がありそうである。「得」が「水滸傳」でどのように用いられているか、これについてその用例を検討し、その機能を明らかにする必要がある。

(21) 孙立生擒得雷炯，魏定国活拿了计稷。(98)

(22) 祖士远听了大惊。急聚众将商议。宋江已令砲手凌振，放起连珠砲。乌龙岭上寨中石宝等，听得大惊。(97)

(23) 若是回头人也好，只是中得我意。(24)

(24) 虽然官小职微，亦未曾立得功勳，以报朝廷赦罪之恩。(85)

(25) 小弟赴水到海口，进得赭山门，被潮直漾到半播山，赴水回来。(96)

(26) 你这小去处，砍得两个人，闹动了世界。(40)

(27) 李逵道：“只指头略擦得一擦，他自倒了”。(39)

(28) 白秀英却在茶房里听得，走将过来，便道：(51)

この用例の「得」は、いずれも動作の完了を表わす時態助詞と解される。用例(21)は、並列関係の複文で、孫立と魏定国がそれぞれ敵の雷炯と計稷を生

け捕りにしたことを述べた文である。生け捕りにしたことを前の分文では、「生擒得……」、後の分文では「活拿了……」となっている。この二つの分文は明らかに「生擒」と「活拿」の動詞が完了したことをそれぞれ「得」と「了」で示し、同じ助詞のくり返しを避けているが、同義に用いている。また、用例(22)は、一つの句群の中で、「聞いて驚いた」という意味の文を、前の文では「听了大惊」、後の文では「听得大惊」と表現している。この「得」が「了」と同義であることは、文脈からも明らかである。用例(23)(24)(25)(26)は、述語が述賓連語で、述語動詞と賓語の間に「得」が用いられているが、完了の意味を表わしている。用例(27)は、述語が動詞の反復で完了を伴った「擦了一擦」と同義であり、用例(28)の「听得」も「听了」と解され、いずれも「得」は時態助詞「了」の意味に用いている。このように「得」を補語を導く構造助詞とせず、完了を表わす時態助詞として扱い、「動詞・賓語・補語」の構文で処理すれば、(7)から(20)までの用例すべてが統一的に、しかも合理的に説明がつく。

以上の用例は、主動者と受動者の両方が関係するが、実際は、両方もしくはどちらか一方が省略されて文中に現われない場合が多い。この省略された成分は、文脈によってこれを補うことができる。

『水滸傳』には、この主動者と受動者の関係を介詞を用いてこれを明示しようとした文が見られる。

(29) 因此高太尉被追赶得慌，飞奔济州。(79)

(30) 奴家昼夜泪雨成行，要寻死处，被他监看得紧。(73)

(31) 他家庄上被我杀得一个也没了。(50)

この用例は、「被」字文である。用例(29)は、受動者が主語にたち、「被」の後に主動者が省略されている。用例(30)は、主動者が「被」によって「他」であることが示されているが、受動者である主語は省略されている。用例(31)は、主動者と受動者がともに文中に用いられ、両者の関係は「被」によって明らかにされている。さらに、介詞「吃」によって主動者と受動者の区別を表わした文も見られる。

(32) 李逵吃跌得头破额裂，半晌说不出话来。(53)

(33) 虽然吃了他些苦，黄文炳那贼也吃我杀得快活。(41)

この用例は、「吃」を用いた受動文である。「吃」は、本来、動詞であるが、近世語では受身を表わす介詞に用いられる。用例(32)は、受動者「李逵」が主語にたち、「吃」の後には主動者の「牢子獄牢」が省略されているが、

主動者と受動者の関係は「吃」によって表されている。用例(33)は、主動者と受動者がともに文中に現れているが、両者の関係は「吃」で示され、主語が受動者であると示している。

『水滸傳』では、主動者と受動者の関係は、文脈や介詞「被」「吃」の使用によって理解されるが、さらに、現代語と同じく受動者を介詞「把」で前置する用法がある。

3. 「把・O・V・de・C」

- (34) 薰超，薛霸又添酒来，把林冲灌的醉了，和枷倒在一边。(8)
- (35) 众人下手，把柴进打得皮开肉绽，鲜血迸流，只得招做“使令庄客李大打死殷天锡”(52)
- (36) 李逵把这伙人打得没地躲处，便出到门前。(38)
- (37) 刘高看了大怒，把书扯的粉碎，大骂道：“花荣这厮无礼？”(33)
- (38) 我们昨日不曾使神行法，今日须要赶程途，你先把包裹拴得牢了，我与你作法，行八百里便住。(53)
- (39) 推司也觑他是个首身的好汉，又与东京街上除了一害，牛二家又没苦主，把款状都改得轻了。(12)

この用例は「把」字文で、動作の対象が介詞「把」で前置されたものである。用例(34)(35)(36)は、受動者である人が「把」で動詞の前に出されて、その人がどのような取り扱いを受け、その結果がどういう状態になったかを説明したものである。これに対して、用例(37)(38)(39)は、動作の対象になるのは物である。これも、受動者である物がいかなる処置が加えられ、その結果どういう状態になったかを述べたものである。

「把」字文は、動作の対象となる賓語を、介詞「把」で前置するので、主動者と受動者の関係が明瞭となり、しかも、中心語と補語を直結するので構造が簡潔となる。

(二) 介賓連語補語

『水滸傳』には、介賓連語が補語となっている用例は少なくない。介賓連語を構成する介詞には、「在」「于」「到」「与」などがある。用例数が最も多く、しかも動詞や場所語と複雑な関係を示している「在」を取り上げる。

1. 「V・在・C」

- (40) 張清又一石子，錚的打在盔上，吓得楊志胆喪心寒，伏鞍歸陣。(70)
 (41) 我只道吊桶落在井里，原來也有井落在吊桶里。(21)
 (42) 教頭緣何被吊在这里？(11)
 (43) 軍器眾將都埋藏在船艙里(95)
 (44) 肅訛，樂和，軟監在府里。(81)
 (45) 小衙內有在这里。(51)
 (46) 洒家的銀子有在这里。(4)

この用例は、介詞「在」が場所語と連用されて介賓連語を構成し、動詞の後に置かれて補語となったものである。動詞と場所語の関係は、動詞の性質によっていくつかの種類に分けられる。一つは、用例(40)(41)で、動詞「打」「落」は瞬時に完了し、場所語はその動作がその場所に及んだことを表わしている。もう一つは用例(42)(43)(44)で、動詞「吊」「埋藏」「軟監」はその動作自体に持続性があり、場所語の示すその場所に動作の完了後も状態として持続していることを表わしている。このように動作が持続する場合には、よく動詞の後に結果補語として持続・安定の意味をもつ「住」が用いられ、その動作の持続する意味を補足する。

- (47) 那猴子死頂住在壁上。(25)
 (48) 辽兵喊杀连天，四下里撞击，左右被番军围住在垓心。(86)

さらに一つは、用例(45)(46)のように、動詞に「有」が用いられて、場所語にある物が存在することを表わしている。この用例は、現代語ではほとんど見かけない。この用例を現代語の語法で言い替えるなら、場所語が動詞の前にきて「在这里有小衙内」「在这里有洒家的銀子」の語順となる。この表現によく似た用例に動作の行われる場所を示したものがある。

- (49) 吳用道：“我已寻思在肚里了”。(18)
 (50) 若不是太師福荫，小官粉骨碎身在梁山泊。(75)
 (51) 三百神兵不曾走得一个，都被杀在寨里。(54)

この用例は、現代語ではあまり用いられない。場所語は、動作の行われる場所を表わしている。用例(49)の場所語「肚子」は動詞「寻思」の行われる場所であり、用例(51)は、場所語「寨里」は動詞「杀」の場所を表わしている。現代語では場所語を動詞の前に置いて「在・場所語・動詞」の語順をとるのが普通である。

上掲の用例は、介詞「在」が動作の及ぶ場所や動作の持続する場所、ないしは動作の行われる場所、存在する場所を表わしたが、これ以外に、動作の

到達点を表わす用法がある。

(52) 俺在江湖上多聞师兄大名，听的说道师兄在大相国寺里挂搭，如今何故来在这里？⁽¹⁷⁾

(53) 侍者吃了一惊，赶出外来寻时，却走在佛殿后撒尿。⁽⁴⁾

(54) 谁想直断送在这里，丧了残生！⁽³⁷⁾

(55) 贺统军正退回在城中，为折了两个兄弟，心中好生纳闷。⁽⁸⁶⁾

(56) 那一个小牢子把他两个带在牢里来。⁽⁴⁹⁾

(57) 你三个是甚么人，却走在哪里来？⁽³⁷⁾

(58) 张顺再伏在水里去了。⁽⁹⁴⁾

(59) 两边水手都跳在水里去了。⁽⁷⁵⁾

この用例に見られる介詞「在」は、現代語で言えば介詞「到」の用法である。用例(52)の「来在这里」は「来到这里」と解せられ、用例(53)の「走在佛殿后」は「走到佛殿后」で、場所語は動作の到達点を表わしている。これらの用例の「在」が「到」に解されるのは、動詞が移動を伴う動作を表わすからと考えられる。「来」「走」「断送」「退回」「带」「伏」「跳」はいずれもそうである。従って、用例(56)(57)(58)(59)のように方向補語「来」「去」を伴って「带在……来」「走在……来」「伏在……去」「跳在……去」と連用され、現代語の「V・到…来(去)」と同義に用いられている。

『水滸傳』は、もちろん現代語と同じように移動を伴う動詞には「到」を用いて「来到庄前(2)」「走到我下处(51)」「带到这里(8)」とした用例も見られる。当時、「在」と「到」を厳密に区別しなかったのは、現代語のように動詞の性質の違いに注意を払わず、たんに動作と場所を結び付けることだに意を用いていたためと考えられる。

2. 「V・O・在・C」

(60) 宋时，这座林子内，但有些冤仇的，使用些钱与公人，带到这里，不知結果了多少好汉在此处。⁽⁸⁾

(61) 却藏黑旋风等二百余人将校在船舱里。⁽⁹³⁾

(62) 闲常时也元自劫了人，莫说如今又添了那一伙強人在里面。⁽¹⁹⁾

(63) 城中监着两只大虫在牢里，如何不做提备？⁽⁵⁹⁾

(64) 众人相随来到水边，梁山泊已摆着三只战船在彼，一只装载马匹，一只装裴宣等一千人，一只请太尉下船，并随从一应人等。⁽⁷⁵⁾

(65) 智深猛闻得一阵肉香，走出空地上看时，只見墙边沙锅里煮着一只狗在那里。⁽⁴⁾

この用例は、賓語が動詞の後に入った文型である。この文型は、場所語が

二つの意味に用いられている。一つは、用例(60)のように場所語が動作の行われる場所を表わしている。つまり「在此处」は多くの好漢たちが殺された場所で「在此处結果了多少好汉」の意味である。もう一つは、動作のあとその状態が場所語に持続することを表わしている。用例(61)(62)(63)(64)(65)がそれで、用例(61)の場所語「船舱里」は動詞「藏」の状態が持続する場所である。

『水滸傳』は、現代語に比べて、場所語が補語の位置で示されることが多いが、さらに、用例(64)(65)のように状況語と補語の両方で表わされることがある。用例(64)は、状況語「梁山泊」と補語「在彼」で三隻の軍艦が並べられている場所を表わしており、「在彼」は場所語の復指成分と考えられる。用例(65)は、犬が煮られている場所を動詞をはさんで状況語「沙锅里」と補語「在那里」で同一場所を表わしている。これらの用例は、具体的な場所を表わしている状況語だけで十分にその意味は表わされているのに、さらに文末に代詞を復指成分として用いているが、「在彼」「在那里」は場所語としての機能は弱くなっているように思われる。

この文型の一つに、動詞「有」を使った用例がある。

- (66) 那婆子约莫到县前左侧，把宋江一把结住，发喊叫道：“有杀人贼在这里！”⁽²¹⁾
 (67) 只见灶边破添春台，只有些灰尘在面上。⁽⁶¹⁾
 (68) 史进又道：“哥哥既有包裹在寺内，我和你讨去。”⁽⁶⁾
 (69) 水手道：“船梢头有一桶白酒在那里。”⁽⁷⁵⁾
 (70) 便道：“这酒里有蒙汗药在里头。”⁽¹⁰⁾
 (71) 朱贵头领酒店里有个郟城县人在那里，要来见头领。⁽⁵⁰⁾

この用例は、存在を表わす動詞「有」が賓語をとって、人や物がある場所に存在することを表わしたものである。現代語ではこの表現はあまり見かけないが、現代語の語法体系では、介賓連語は動詞の前に置いて状況語とするのが普通である。用例(66)は、「在这里有杀人贼」となる。用例(67)(68)も、「在里头」「在那里」が補語として人や物が存在する場所として用いられている。用例(69)(70)(71)は、人や物が存在する場所として、状況語と補語の両方で表わされている。この用例は、状況語で具体的な場所が示されているので、代詞や方位詞を補語として場所を表わす必要はないわけである。『水滸傳』は、動作の場所を介詞「在」で示そうとする場合、補語として動詞の後に用いられることが多い。状況語で具体的な場所を示しても、文として落ち着きが悪いせいか、もう一度、代詞や方位詞でその場所を示そうとする傾向がある。

3. 「把(将)・O・V・在・C」

- (72) 朱全自进庄里，把朴刀倚在壁边，把门来拴了，走入佛堂内，去把供床拖在一边，揭起那片地板来。(22)
- (73) 燕青起身，把那怕子放在桌上，先拜了李妈妈四拜，后拜李行首两拜。(81)
- (74) 便把那枝箭咬在口里，自把枪带住了事环上，急把左手取出硬弓，右手箭搭上弦，扭过身来，望孙立前心窝里一箭射来。(87)
- (75) 李逵再穿上衣裳，把大斧藏在襟底下。(73)
- (76) 清平世界，如何把我良人妻子关在这里！(7)
- (77) 将御酒摆在桌子上，每一桌令四个人抬，诏书也在一个桌子上抬着。(75)
- (78) 因此我们听的，乘他醉了，把他绑缚在这里，献与大玉。(17)

この用例は、介詞「把」「将」で賓語を前置し、述語動詞と補語を直結させたものである。この文型は、現代語と共通し、動詞は一音節語が多い。同じ成分一動詞・賓語・補語を用いて「V・O・在・C」と「把(将)・O・V・在・C」の二つの文型が構成されている。後者は、現代語と同じく、動作の対象となる人や事物にある処置を加えて、その結果を強調する。しかし、現代語のように既知で特定の賓語に限りこの文型が用いられるのではなく、前者の「V・O・在・C」でも用例(62)のように指示代詞を限定語とした特定の賓語が用いられる。この点から、両者は賓語によって使い分けられたということではなさそうである。前者は、現代語では淘汰されあまり用いられないが、近世語から現代語に移行する過程で、賓語は前置し動作の結果はできるだけ動詞に直結させようとする意識が働いたものと考えられる。ただ、両者の相違を強いて挙げるなら、後者の介詞「在」の使い方に変化が見られる。

- (79) 次日，宋江要行，穆弘那里肯放，把众人都留庄上，陪侍宋去镇上闲玩，观看揭阳市村景一遭。(37)
- (80) 讨了十辆太平车子，唤了十个脚夫，四五十拽车发口，把行李装上车子，行货拴缚完备。(61)
- (81) 阮小二选两只棹船，把娘和老小，家中财赋，都装下船里；(19)
- (82) 酒保一面煮肉打饼，一面烧脚汤与呼延灼洗了脚，便把马牵放屋后小屋下。(57)
- (83) 李逵把双斧拔放箩里，两手去摸底下，四边却宽。(54)
- (84) 再说这鲁智深就客店里住了几日，等得两件家生都已完备，做了刀鞘，把戒刀插放鞘内，禅杖却把漆来裹了。(5)
- (85) 只就当日商量定了，便打併起十数辆车子，把老小并金银财物衣服李等件，都装上车子上。(35)

(86) 宋江答道：“众贤弟且起，把这厮推抢监下。(71)

この用例は、動詞と補語の間にある介詞「在」が用いられていない。「在」の有無にかかわらず同じ意味関係を表わしているが、「在」がなければ、動詞と場所語との構造関係は述賓関係となる。現代語の語法体系からみれば別の文型ということになる。この「在」を用いない「把」字文は、二音節語動詞が述語に多用される。それも「放」が語素となった「牽放」「抜放」「施放」「挿放」などの動詞が多い。一音節語の動詞も用いられているが、その使用数は少なく、用例(80)(81)のように動詞に方向補語がつく場合がある。

(三) 可能補語

1. 「V・de」

(87) 那两件倒都依得。(21)

(88) 若是每常，要三五十尾也有，莫说十数个，再要多些，我弟兄们也包办得。(15)

(89) 宋江道：“将军如何去得！”(58)

(90) 李逵那里忍耐得，腾地跳将过去了。(73)

(91) 宿太尉看了那一班人模样，怎生推托得，只得应允了。(59)

(92) 思量这口鸟气怎地出得，因此再回孟州里去。(31)

この用例は、動詞の後に可能を表わす「得」が用いられたもので、主観的客観的にその動作が実現可能であることを表わす。この文型に属する可能補語の用例数は多くない。その中でも、用例(1)(2)はさらに少なく、この文型は、用例(3)～(6)に見られるような動詞の前に「如何」「那里」「怎生」「怎地」などの代詞を用いて反語の意味を表わし、否定の意味を強調する場合が多い。つまり、この文型は、形式的には肯定型であるが、実際は、反語によって否定の意味に用いられている。

2. 「V・de・0」

(93) 老汉家中也颇有些过活，明日便取了我女家去，并锦儿，不拣怎的，三年五载，养赡得他。(8)

(94) 那妇人道：“只要他医治得病，管甚么难吃”。(25)

(95) 施恩道：“三五百斤石头，如何轻视得他。(28)

(96) 本寺那里容得这等野猫，乱了清规。(4)

(97) 兄弟，你都说得是。却怎地出得这口气？

(98) 海阨黎道：“娘子休笑话，怎生比得贵宅上。(45)

この用例は、賓語を伴ったもので、その賓語は人称代詞・名詞・名詞連語

が用いられているが、いずれも短かい。この文型は、文型(1)と同じく、動詞の前に「如何」「那里」「怎地」「怎生」など代詞が用いられて反語の意味をもたせ否定を強調している。文型(1)(2)ともに動詞の前に代詞を用いて反語の意味に用いている用例は、全体の約 8 割を占め否定的に用いられるのが大きな特徴である。

3. 「V・de・V」

- (99) 李逵拔了一回，那里拔得动。(43)
(100) 今夜伺候得着，望仁兄便那尊步，同赴山寨，以满晷，宋二之意。(51)
(101) 太守独自一个怎生支持得住。(70)
(102) 这李逵却是穿山度岭惯走的人，宋全如何赶得上，先自喘做一块。(51)
(103) 武大抢到房门边，用手推那房门时，那里推得开。(25)
(104) 三个商量道：“似此如何杀得出去？”(77)

この用例は、現代語にも常用される文型で、結果補語や方向補語の前に構造助詞「得」を用いて可能補語を構成し、動作が実現可能であることを表わす。補語となる動詞は「动」「着」「住」が多用されている。方向補語は、単純方向補語と複合方向補語が用いられているが、具体的な方向を表わす場合と、用法が拡大されて抽象化された意味を表わす場合もあり、ほとんど現代語の用法と同じである。この文型も、形式は肯定型であるが、用例の約 8 割が「如何」「那里」「怎生」などの代詞が動詞の前に用いられて否定の語気を強めている。

4. 「V・de・O・V」

- (105) 若是今夜兜得他住，那人恼恨都忘了。(21)
(106) 吾师，你却如何正等得这贼首着？
(107) 黄信见三个好汉都来併他，奋力在马上斗了十合，怎地当得他三个住。(34)
(108) 你作起神行法来，谁人赶得你上？(53)
(109) 天色看看黑了，倘或又跳出一只大虫来时，我却怎地斗得他过？(23)
(110) 没酒时，如何使得手段出来！(29)

この文型は、賓語が構造助詞「得」と補語の間に用いられたもので、現代語ではあまり用いられない用法である。この文型の賓語は、人称代詞あるいは人を表わす名詞がほとんどで、例用(110)のように名詞が用いられることは少ない。結果補語は、文型(3)と同じく「动」「着」「住」などが多用され、方向補語は単純方向補語・複合方向補語ともに、意味が拡大され抽象化され

たものが多い。

この文型も、動詞の前に代詞「如何」「怎地」などが用いられて反語となり否定の意味に用いられている。

肯定型の可能補語は、以上の四つの文型に分けられるが、いずれも用例の8割以上が反語の意味に用いられているため、実際の肯定は極めて少ないことになる。

5. 「V・不・de」

(111) 自从嫁得你哥哥，吃他忒善了，被人欺负，清河县里住不得，搬来这里。(24)

(112) 婆措道：“没得只顾缠我！我饱了，吃不得”。(21)

(113) 虽是被人逼迫，事非得已，于法度上却饶不得。(20)

(114) 一个村坊过去不得，怎地敢抵敌官军？(2)

(115) 那妇人道：“了便了了，只是我手脚软了，安排不得”。(25)

(116) 一丈青见宋江义气深重，推却不得。(51)

この用例は、文型(1)に否定詞「不」を伴った文型である。動詞の後に「得」を用いた可能補語は、肯定型と否定型に分けられるが、この両者を比較すると、否定型の方が使用頻度が高らかに高い。この否定型は、客観的な情勢から判断して、その動作が不可能であることを表わす。

6. 「V・不・de・O」

(117) 众邻舍道：“却吃不得饭了！”(26)

(118) 你只躲的我箭，须躲不的我枪！”(87)

(119) 两个斗到十合之上，急切赢不得一丈青。(55)

(120) 你也无大量之才，也做不得山寨之主！(19)

(121) 恩主如常觑老汉，又蒙与终身寿具，老子今世报答不得押司，后世做驴做马报答官人。(81)

(122) 败军无心恋战，只顾奔走，救护不得后军。(79)

この用例は、賓語を伴った文型である。賓語が可能補語の後に用いられ現代語と同じ用法である。『水滸傳』では、賓語はすべて可能補語の後に置かれるとは限らない。次の文型に示すように、賓語が動詞のすぐ後にくる用例も見られる。

7. 「V・O・不・de」

(123) 武松道：“原来怎地！却饶你不得”(80)

(124) 近年泊内是宋江一伙強人在那里打家劫舍，官兵捕盗，近他不得。(61)

(125) 累累请将法官来，也捉他不得。(73)

(126) 军情主事，少他不得。(85)

(127) 这个是人命的公事，你却嗔怪我们不得。(22)

(128) 官司累次着仰捕盗官军来收捕他不得。(57)

この用例は、文型(6)と同じように動詞が賓語を伴った文型である。この二つの文型は、賓語の位置の違いによって分けられる。文型(6)は、賓語は可能補語の後に、文型(7)は、動詞のすぐ後である。この両者は任意に使い分けられているのではなく、賓語の性質によって使い分けられている。文型(6)は、「飯」「我枪」「一丈青」「山寨之主」「押司」「后军」など普通名詞や人名が賓語に充てられている。これに対して、文型(7)は、人称代詞に限られており、「你」「他」「我们」などが賓語に用いられて文型(6)とその用法を異にする。

8. 「V・不・V」

(129) 那厮搅了老娘一夜睡不着。(21)

(130) 我几个老的走不动，只得在这里过，因此没饭吃。(6)

(131) 宋江军马抵当不住，转身便走。(88)

(132) 打闹里，那大王扒出房门，奔到门前，摸着空马，树上折枝柳条，托地跳在马背上，把柳条便打那马，却跑不去。(5)

(133) 押司不要跑了去，老人家赶不上。(21)

(134) 卢员外，你还恁地不晓得，中了俺军师妙计，便肋生两翅，也飞不出去。(61)

この文型は、肯定型の文型(3)に「不」が入れ替った否定型で、動作の実現が不可能であることを表わす。両者を比較すると否定形の使用頻度が高く、補語に充てられる動詞の種類も多い。常用される補語として「住」「着」「动」があるが、特に「住」が補語として用いられている用例に次のような特徴がみられる。その特徴は二音節語の述語動詞が多用されるということで、「抵挡」「拦当」「阻当」「抵敌」「迎敌」「遮拦」「遮掩」「苦留」「挽留」「留连」「收勒」「吵闹」「忍耐」「苦劝」「屯扎」「捉摸」「按纳」などが用いられている。方向動詞が補語に用いられるのは現代語とほぼ同じで、用例(132)(134)のように具体的な動作の方向を示すものと、用例(133)のように方向補語の意味が抽象化したものがある。

9. 「V・不・V・0」

(135) 二将斗不过三十余合，徐宁敌不住番将，望本阵便走。(83)

- (136) 便是我迷踪失路，尋不着宿頭。(61)
 (137) 早着一下，便使不動鋼鞭，回归本陣。(70)
 (138) 林冲上的楼上，尋不見高衙内。(7)
 (139) 小僧是五台山来的和尚，要上东京去干事，今晚赶不上宿頭，借贵庄投宿一宵。(5)
 (140) 便是保正与兄十分了得，也担负不下这段事。(14)

この用例は、補語の後に賓語を伴った文型である。可能補語の否定形で賓語を伴う場合は、賓語を可能補語の後に置く用例と動詞のすぐ後に置く用例の二通りに分かれる。この両者には、賓語の性質によって使い分けられているようで、文型(9)は、名詞が賓語に充てられている。

10. 「V・O・不・V」

- (141) 若是他有心恋你时，身上便有刀剑水火也拦他不住，他也不怕。(21)
 (142) 我若还拿你不着，便输这颗头与你。(73)
 (143) 我见那妇人随后便出来，扶大郎不动。(26)
 (144) 我指望拿他来祭门，却寻那厮不见。(40)
 (145) 朱全恨不得一口气吞了他，只是赶他不上。(51)
 (146) 祝彪战李应不过，拨回马便走。(47)

この用例は、賓語が動詞のすぐ後に用いられた文型である。現代語では、この文型あまり用いられず、賓語は補語の後である。『水滸傳』の用例は、動詞に賓語と可能補語の二成分を伴う場合、賓語の位置は二個所に分かれる。文型(9)は、賓語が名詞で可能補語の後に置かれ、現代語と同じ語順を示したが、この文型(10)は、賓語が動詞のすぐ後である。その賓語は文型(9)と違って、人称代詞や人名あるいは人を表わす名詞が用いられて、両者は用法上の相違をみせている。このように、賓語が人称代詞であれば、普通、文型(10)が用いられるが、賓語が介詞「和」で動詞の前に置かれることもある。

11. 「和・O・V・不・de」

- (147) 不得贤弟自来力救，便有铜唇铁舌，也和他分辩不得。(33)
 (148) 父亲懦弱，和他争执不的，他又有钱有势。(3)

この用例は、人称代詞の賓語を介詞「和」で前置して、述語動詞と可能補語を直結させた文型である。この文型に属する用例は多くはないが、述語動詞と可能補語を近づけようとして人称代詞の賓語を前置したものであろう。

賓語の前置は、「把・O・V・de・C」と「把(将)・O・V・在・C」でも見られた。この二つの文型は、賓語を「把」で前置し動作の対象に処置を加え、

その結果を補語で示した。同じ賓語を前置した文型「和・O・V・不・de」は処置式を使って「把」で前置せず「和」を用いたのは、補語が可能を表わすだけで処置の結果を表わさないためであろう。

む す び

述語動詞が賓語と補語の二つの成分を伴う文型は、現代語にも見られる。現代語は、賓語を前置するか、あるいは補語の後に置くのが一般的な用法である。つまり、述語動詞と補語を直結させる方法をとっている。『水滸傳』は、現代語より複雑で、現代語と同じ文型以外に、賓語を述語動詞と補語の間に用いる文型がある。とくに、介賓連語補語の場合にその傾向が目立つ。用例は介詞「在」しか示さなかったが、「到」「与」「于」にもそれが著しい。

『水滸傳』で常用されるこの「動詞・賓語・補語」の文型は、現代語ではほとんど用いられない。なぜこの文型が数百年の間に用いられなくなったのであろうか。

文型「動詞・賓語・補語」の賓語は、ほとんど動作の対象である。動作の対象は必ずしも賓語の位置にくるとは限らず、主語の位置にも置かれる。

『水滸傳』では、主語と対象賓語がよく省略される。このような理由から、述語動詞と補語が直結する機会が多くなる。現にその用例も多く見られる。補語が述語動詞の連帯成分として直結するようになり、その構文が定着すると、「動詞・賓語・補語」の賓語を移動し、述語動詞と補語を直結させようとする意識が働くようになったものと考えられる。